

アルフレッド・マーシャル

——とくにその価格論と分配論とのつながりについて——

山 田 雄 三

はしがき アルフレッド・マーシャルについては、五年前の本誌昭和三十四年四月号特集に、馬場啓之助教授の筆になる極めて要を得た解説がある。再び同じ特集で同じ人物をとりあげることには多少躊躇を感じたが、かなり年月も経っているし、それに古典的な文献ともなればいろいろな角度から幾度も繰り返し読まれてよいとも思われるので、ここで編集担当者の了解を得て再びマーシャルをとりあげさせてもらった。ただ私自身はとくにマーシャル経済学のかなの或る特殊面に焦点をしばらく、その意義を考えるだけであり、それはマーシャルの一面をやや極端に強調する結果になりそうである。幸い馬場教授の前記の優れてフェアな解説があるので、読

者はそれを解毒剤として併用されるがよい。なお馬場教授はその後前記論文を布衍して『マーシャル』（昭和三十六年刊、勁草書房）なる一書を出しておられることを付記しておこう。ついでに、拙稿「マーシャルの産業組織論について」（『酒井正三郎博士記念論文集』昭和三十七年刊）は主としてマーシャルの主著の第四編をとりあげたものであり、本稿は同じ視点を第五編および第六編に拡充して見たものである。

一 需要供給説と生産費説

価格の決定についてグラフの上に右下りの需要曲線と右上りの供給曲線を描き、その交点によって均衡を説明

することは今日普通に行なわれているところであるが、それはだいたいにおいてマーシャルに端を発する工夫である。⁽¹⁾このような需要・供給の交叉を時に「マーシァリアン・クロス」と呼ぶのはそのためである。ところで、マーシァルの『経済学原理』第五編をそういう視点だけから読んでいくと、たちまち戸まどいを感じるのではないかと私には思われる。

たしかに第五編の表題は「需要・供給・価値の一般関係」となっている。しかし需要供給の関係によって価格の決定を説明しているのは、実はその第二章で地方穀物市場に関連させていわゆる「一時的均衡」なるものを取り扱っている僅かの部分に過ぎず、第三章以下では全く異った観点から「正常均衡」もしくは「正常価格」なるものを説き、さらにそれと関連させて「収穫法則」なるものを説いているのである。⁽²⁾そこに見られる価格論の実体は需要供給説というよりはむしろ生産費説であると、私は見たい。すなわち、「正常均衡」においては需要よりも供給が支配的と考えられ、「正常価格」とはとりも直さず供給価格であり生産費であった。とくにマーシァルは供給価格もしくは生産費を産業別にとらえ、産業に

よって費用逓減・逓増・不変の三つが区別されると考えた。それらは逆にいえば収穫逓増・逓減・不変の三つになる。要するに、単にその時々々の需要供給によって或は高く或は低く決まる価格の高さがここでは問題ではなく、経済の発展にともなう各財の生産費の変化が問題だったのである。マーシァルの「一時的均衡」は明らかに需要供給説であるけれど、それを超えてマーシァルは「正常均衡」なるものを究明しようとし、ここでは生産費説の立場をとったのである。たしかにマーシァルでは、「正常均衡」の場合にも一般的には需要と供給の両面によって均衡が決定されると見たようである。そのいづれか一面を強調する説に対しては、有名な鉄の両刃の比喩をもち出して反対している。⁽³⁾そうしてやや妥協的な立場から、程度の差として、短期的には需要が、長期的には生産費が重要になるとして次のごとく説いた。曰く「原則として、考察する期間が短かければ短かい程価値に及ぼす需要の影響に着目せねばならぬ程度も大である。その期間が長ければ長い程、価値に及ぼす生産費の影響が愈々重要となってくる」と。⁽⁴⁾しかしこの説明は正確でない。むしろ短期的に価格の変動を説くには需要供

給のその時々⁶の強弱に着目せねばならず、長期的に価格の変化を説くには需要供給の均衡そのものの推移として生産費の変化に着目せねばならないのであって、問題に区別があるのである。需要供給説は均衡を考えながらも実は変動を問題にするものであり、生産費説はむしろ均衡の推移を経済の発展と関連して問題にするものなのである。

前述のごとくいわゆるマーシアン・クロスを示すグラフは『原理』第五編第三章のうちにできて、そこでは右下りの需要曲線と右上りの供給曲線が描かれ、その交点によって「安定均衡」が説明されている。しかしこのグラフが出てくる第三章はすでに「正常均衡」を取り扱っているのであり、その註を見ると、供給曲線が右上りに描かれるのは収穫逓減（費用逓増）法則にしたがう場合を考えているからである、とマーシャルはいい、もし供給曲線が水平な直線ならば収穫不変（費用不変）をあらわし、またそれが右下りならば収穫逓増（費用逓減）をあらわすと断っている。⁶「一時的均衡」の場合は、地方穀物市場の数字例で示すように、価格が高ければより多くの量が供給されるという供給のビヘイヴィア⁷が考え

られていたが、「正常均衡」の場合はそれとは全く異り、生産費の変化が生産の増加に応じていろいろに考えられ、したがって必ずしも右上りにはならないとされているのである。もっとも、マーシャルには、動態的な問題を静態的な分析でとらえようとした無理があり、このことは後にスラフファに端を発する生産費分析の議論によって指摘されたのである。⁷その影響を受けて、今日の通説では、静態的に一定の設備のもとに生産量を増せば、平均費は低下していつて或る生産量で最低に達し、それから上昇していくとされ、限界費は平均費の最低点でそれと交わるが、その左側においては平均費より大であり、その右側においては小であるとされる。そうして普通の供給曲線の奥にあると考えられる生産費曲線は平均費の最低点より右にあって、上昇しつつある限界費であり、したがってそれは右上りの曲線を描くのである。たしかに静態的には以上のごとく考えるべきであり、これに対し長期的に生産費の逓増とか逓減とかいう場合は、静態的な費用構造における平均費の最低点そのものが上昇したり下降したりするというふう⁸に考えるのが、今日の一般の考え方であろう。たしかに分析を静態から出発

しなければならぬとするならば、そのように考えなければならないであろう。マーシャルには、静態的な需要曲線・供給曲線のグラフを用いながら、供給曲線について動態的な意味を与えようとした曖昧さがある。しかし注意しなければならぬのは、経済発展にともなう生産費の変化を明らかにしようというのがマーシャルの「正常価格」と呼ぶ問題であって、それにはむしろマーシャル・アン・クロスの図を全然棄てた方がよく、したがって直接に生産費曲線もしくは価格曲線について逓増・逓減・不変の三つを分ければよかったのである。その場合、示されるべきものは生産量増加にともなう価格そのものの逓増・逓減・不変であり、需要供給が対立的に考えられるのでなく、需要供給が一致しながら均衡価格そのものが推移するのである。それがマーシャルの「正常価格」の問題なのである。

ここでアダム・スミスの「市場価格」と「自然価格」との区別を思い起こされるのがよい。スミスの「市場価格」とはその時々々の需要供給の関係によって或は高く或は低く決まる価格であり、「自然価格」とは生産費に等しい価格である。価格は結局において生産費に等しくな

る傾向があり、その意味で「自然価格」に落ち着くものであるが、その時々々の「市場価格」は需要供給の関係によって左右され、生産費を上廻ったり下廻ったりする、とスミスは見たのである。マーシャルの「一時的均衡」はむしろスミスの「市場価格」にあたり、これに対しその「正常均衡」はスミスの「自然価格」にあたるといってよい。⁽⁸⁾この意味で、マーシャルもスミスも、同様に生産費説の立場をとるのであるが、しかしスミスにあっては、自然価格を分解して、賃金・利潤・地代などにそれぞれの自然率があるというのであり、それら自然率は市場における変動の間に自然に成立する率と解され、したがって需要供給説の奥に自然価格を認めながら、その内面的な意義が究明されず、むしろ生産諸要素について再び市場の需要供給をもち出すような考え方になってしまつて、その点やや不徹底に終っている。生産費説は経済発展にともなう生産費の変化を明らかにしなければならぬのである。

最近、ジョン・ロビンソンはその著『経済成長論』⁽⁹⁾において価格論に二つの流れがあるといっている。一つは需要供給による価格の決定を考えるワルラスの流れであ

り、他は「正常価格」を考えるマーシャル(あるいはマルクス)の流れである。この場合、「正常価格」とは、ロビンソンによれば、「正常利潤」および「正常賃金」から成り立つものであり、価格論の奥に所得論ないし分配論を認めるものと解される。このような問題は、マーシャルでは『原理』第六編「国民所得の分配」のうちにとりあげられており、それは第五編において収穫法則もしくは費用法則という形で問題と区別しなければならぬ。換言すればマーシャルの「正常価格」と呼ばれる問題には、第五編のような生産費遞減・遞増を考えるものと、第六編のような所得分配を考えるものが含まれ、ロビンソンはもっぱら後者を指していたようである。しかし私の解するところでは、需要供給説に對立するマーシャルの「正常価格論」は生産費説の立場に立ち、これら二つの問題を含むものと考えたい。すなわち経済発展にともなう生産費の変化について、賃金・利潤を一定とした場合と、それらが変化する場合とを分けて考えるのが、マーシャルなのである。そうして一般に需要供給説は売買という関係にとどまるものであって、価格の高さが経済の発展にともなうという内面的意義をもつかとい

うようなことを問わない。生産費を分解して労働なり資本なりの需要供給を考えるのも、また生産費を単に供給側の一原因として考えるのも、いずれも生産費説ではなく、生産費説は価格の高さの経済発展上の意義を考えるものであり、経済発展したがって生産上昇にともなう価格変化なり所得変化なりを明らかにしようとするものである。以下もう少し詳しくマーシャルの『原理』における問題の所在をさぐっていきたいと思う。

- (1) Alfred Marshall: *Principles of Economics*, 1890, 8th ed. 1920, p. 346 (V, iii, 6), p. 468 (V, iii, 4) 大塚金之助訳『経済学原理』第三分冊四八ページおよび二二四ページの註のグラフを見よ。原書引用のカッコ内の数字は編・章・節を示す。以下同じ。
- (2) Marshall: *Principles*, pp. 332—334. 大塚訳、第三分冊二七一—三〇ページ。
- (3) Marshall: *Principles*, p. 337 ff. 大塚訳、第三分冊三五ページ以下殆んど全篇。
- (4) 缺の両刃の例は Marshall: *Principles*, p. 348 (V, iii, 7.) and p. 820 (Appendix I.) 大塚訳、第三分冊五一および三二七ページに出ている。
- (5) Marshall: *Principles*, p. 349 (V, iii, 7.) 大塚訳第三分冊五三ページ。引用に際し仮名遣いを改む。以下同然。

(6) 前出(1)と同じ箇處を見よ。

(7) Piero Sraffa: *The Laws of Returns under Competitive Conditions*, *Economic Journal*, 1926 是有名である。なお Walter Zöll: *Das Kostenproblem in der Wirtschaftstheorie*, 1930 はスランファ以後の生産費分析を展望した文献。

(8) Marshall: *Principles*, p. 347 (V, iii, 6). 大塚訳第三分冊四九ページ参照。ただし「自然的」とか「正常的」という言葉は形而上学的に理解され易い欠点があり、むしろ「長期的」とか「恒常的」とかいう言葉の方がよいと思うが、ここではそういう点にまで議論を進めない。

(9) Joan Robinson: *Essays in the Economic Growth*, 1962. 山田克巳訳『経済成長論』の序文および第一論文「正常価格」を参照されたし。

二 労働生産性の変化

マーシャルの「正常価格」とは生産費に他ならず、その生産費についてまず問題になるのは、財の種類なり産業の種類なりによって一単位あたりの生産費が或は逓増し、或は逓減し、或は不変にとどまるということである。またこの生産費の逓増・逓減或は不変は、逆の面から、収穫逓減・逓増或は不変として説かれている。つま

り、アダム・スミスの「自然価格」では、価格が結局のところ生産費に落ちつくという説明があるに過ぎないが、マーシャルではそういう生産費が経済発展にともなう変化することが考えられ、しかも財の種類なり産業の種類なりによって一定の傾向を示すことが問題にされたのである。

この点についてマーシャルの説明は必ずしも明確ではなかった。彼はしばしば静態的分析に囚われていたため、その論旨をやや曖昧にしてしまった。しかしとにかくここで柱となる考え方は、一方では土地利用にともなう収穫逓減もしくは生産費逓増が現われることと、他方では技術進歩にともなう収穫逓増もしくは生産費逓減が現われることの二つであった。前者は『原理』第五編第八章で「土地に投ずる各種の資本・労働を釣合よく増加しても収穫は逓減する」という命題として述べられている。⁽¹⁾これに対し後者は第十二章で晴雨計の例をあげて次のごとく説明されている。「一例をとれば時計型晴雨計である。これが突如として流行すればまず最初の結果は価格の一時的騰貴であろう。蓋し高い賃銀を払って他の産業から労働を招致せねばならぬからである。とは

いえもしこの流行が永続すれば、晴雨計製作の費用は段階低落するであろう。蓋し、専門的熟練は豊富となると同時に、現在筋肉が営む作業の多くは特化機械が一層よく且つ安く営むに至るからである」と。問題は、産業によって「労働生産性」の変化に高低あり、そのため価格構造に変化があらわれるという点にある。ただしマーシャルは「労働生産性」という語を用いず、直接生産費と供給価格が変化するものと説明した。

これに関連して、マーシャルにはその説明を曖昧にしたもう一つの欠点があったようである。つまり、マーシャルは労働生産性ということと直接とりあげようとせず、その代わりに実質生産費なるものを考えた。マーシャルによれば、或る財の一定量を生産するに必要な「努力犠牲」をその財の「実質生産費」といい、努力犠牲を招致するために支払わねばならぬ価格を「供給価格」又は「貨幣生産費」という⁽³⁾。そうしてこの場合、「実質生産費」という語はマーシャルでは貨幣表示の奥にひそむ何か本体的(サブスタンシアル)なものを意味していたようであるが、そういうものを考えることは長所と見るよりも短所と見るべきであろう。むしろ貨幣生産費を

分解して、労働量に賃金率を乗じた労働費や、資本量に利子率を乗じた資本費などの合成と考え、したがって生産のために投下される資本量・労働量という量的部分と、それらに乘ぜられる賃金率・利子率という所得的部分とを分けて考えることが大切だと思う。簡単に或る財の生産量を Q 、その価格を P 、労働量を L 、その賃金率を w 、その他の費用の賃金額に対する比率を π とすれば

$$PQ = wL(1 + \pi) \quad (4)$$

なる式が成り立つ⁽⁴⁾。この式において価格 P の変化は労働生産性の項目 Q および L と所得の項目 w および π によって左右される。換言すれば、価格の変化は労働生産性の問題と所得の問題とに分解されるのである。そうして、もしここで賃金率および π が一定ならば、労働生産性の L が高まれば価格が下降し、労働生産性が低まれば価格が上昇することになる。マーシャルが問題にする供給価格(もしくは生産費)の増減はむしろこのようにして理解するべきものと私は思う。

このような解釈が許されれば、マーシャルの価格論の立て方はリカードのいわゆる「相対価値の変動」と呼ぶものに極めて近いのである⁽⁵⁾。リカード価値論については

いろいろな解釈が行なわれているが、私はそれを根本的には生産費説であると解している。それはリカアドのあげている数字例を見ればわかる。穀物の生産が例えば五〇ポンドの賃金で一〇〇人の労働によって一年間かかって行われ、利率が一〇%だとすると、穀物の生産費は

$$(\$50 \times 100)(1 + 10\%) = \$5,500$$

となると計算されている。これに対し織物の生産が同じく五〇ポンドの賃金で一〇〇人の労働によって一年間かかって行われ、しかもこんどは仮りに五、五〇〇ポンドに相当する機械（一〇〇人労働の一年間の結果として）を一年間使用したとし、利率が一〇%（減価償却は計上しないものとする）だとすると、織物の生産費は

$$(\$50 \times 100)(1 + 10\%) + \$5,500 \times 10\% = \$6,050$$

となると計算されている。これらの計算は普通いう生産費の計算に他ならない。ところで、リカアドの問題は、いま穀物と織物の比価が或る一定の時期に $\$5,500 : \$6,050$ だとし、数年後にその比価がどういふ原因でどういふふうに変化するかを吟味しようとするにあった。直ちにわかるように、変化の原因としては、賃金率や利率率の変わる場合と労働量の変わる場合とが考えられるが、リ

カアドによれば、賃金率や利率率の変化は両生産物の比価の上に多少の影響をもたらすことはたしかであるが、もっと大きな影響は、穀物の生産が困難になるとか、織物の生産が容易になるとか、要するに労働量の増減したがって労働生産性の変化によって起こるのだ、⁽⁶⁾ というのは。リカアドのここでの説明を見ると、明らかに生産費説に立って価格の変化を考え、しかも労働生産性の変化を主要なインデックスと見ているのである。さらに

ここであげている例からわかるように、リカアドでは農産物と工産物とが対比され、農産物は収穫逡減によって生産性が低下するのに対し、工産物は収穫逡増によって生産性が上昇すると考えられ、農産物と工産物との間のいわゆる「相対価値の変動」もしくは産業別の価格構造の変化を考えようとしたのである。

マーシャルがこのリカアドの「相対価値の変動」とだいたい同じ問題を収穫法則または生産費法則の名のもとに展開しようとしたことは疑いない。ただそれをマーシャルは何とか近代的手法で展開しようとし、均衡とか限界分析とかいう考え方に必要以上に囚われ、そのために議論の運び方が必ずしも明確ではなかったのである。私

の見たところでは、収穫法則または生産費法則の問題の中心は労働生産性の変化にあるので、むしろ正しくは労働生産性の通増・通減といった方がよかった。前にあげた式を再び用いるならば、 $PO \parallel wL(1+\pi)$ において、 $O \parallel L$ がわれわれのいう労働生産性である。もし w および π が一定ならば、この式で P と $O \parallel L$ とは反比例の関係となることは明らかであり、 $O \parallel L$ が高まれば P は低くなり、 $O \parallel L$ が低くなれば P は高くなる。 $O \parallel L$ から見れば収穫通増・通減が考えられ、 P から見れば生産費通増・通増が考えられる。ただこの場合注意しなければならぬのは、 w および π が一定と考えられていることであって、 $PO \parallel wL(1+\pi)$ において $O \parallel L$ が増加し、それに比例して w も増加すると、 P は低落せずに一定ということになる。したがって、生産費という語をこの場合の P を指すものと解すれば、労働生産性が増加しても直ちに生産費 P の変化は現われず、マーシャルのように、生産費通増・通増ということを直ちに生産性通増・通増を指すもののように解することは誤りであるといわなければならない。しかも普通にはむしろ労働生産性が上昇すれば賃金上昇する傾向にあるから、価格は必ずしも下落しない。し

かも産業によって生産性に高低がありながら、賃金は均一化する傾向があるとすれば、相対価格の変化はそれだけ複雑なものとなり、産業別価格構造の問題もそういう事情を明らかにするものでなければならぬ。ただマーシャルの『原理』第五編に関するかぎりでは賃金や利潤を一定として、もっぱら労働生産性の変化だけから価格変化を考えたものと解してよいようである。

(1) Marshall: *Principles*, p. 407 (V, viii, 4) 大塚訳第三分冊一三八ページ以下。ここで彼は別に「いづれか一つの生産要因を不釣合に増加すれば収穫は通増する」という命題もあげている。これは静態的な場合に見られることであらう。

(2) Marshall: *Principles*, p. 455 (V, xii, 1.) 大塚訳第三分冊二〇八—九ページ。ただし引用は抄録である。マーシャルはさらに Appendix H. (第八付録)に「収穫通増の場合に静態的仮定を用うる限度」なる問題を論じている。これはジョン・ロビンソンによって「マーシャル自身意識して当惑していた撞着」を示すものといわれた論文である。Joan Robinson: *Collected Economic Papers*, pp. vii-viii 参照。

(3) Marshall: *Principles*, pp. 338—9 (V, iii, 2.) 大塚訳第三分冊三七ページ。

(4) ここではその他の費用として利子や利潤の他に、さら

に生産財の使用額を考えてよい。ただし使用される諸生産財がそれぞれの価格をもつわけだから、問題は複雑になり、この点については註(7)を見られたい。

(5) リカードの言葉によれば、「羅紗」ビースに対し麻布ニビースの価値があったのに、十年後に羅紗ニビースの通常価値が麻布四ビースになったのは如何なる原因にもとづくか」というような問題を「相対価値の変動」 variation in the relative value とする。David Ricardo: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, 1817, *The Works and Correspondence*, ed. by Piero Sraffa, 1953, vol. I, p. 21. 参照。

(6) リカードを労働価値説として解釈することが一般に行なわれているが、私は早くからこれに疑問をもち、リカード説はむしろ生産性を価格変化の主要指標とするものと解している。拙著『チューネン分配論研究』昭和九年刊、一八〇ページ以下および拙著『近代経済学史要』昭和三十三年刊、三二ページ以下を参照されたし。

(7) もう少し一般化して考えるためには、生産物について投入と産出を分けることが望ましい。いまAおよびBの二財があつて、Aの生産のためにA_aおよびB_aを投入し、Bの生産のためにA_bおよびB_bを投入とする。価格をp_a、およびp_b、労働量をL_aおよびL_b、利潤率をr、賃金をwとすれば

$$\begin{cases} (A_a p_a + B_a p_b)(1+r) + L_a w = A_p a \\ (A_b p_a + B_b p_b)(1+r) + L_b w = B_p b \end{cases}$$

が成立するように価格が定められなければならない。ここで大文字の量関係は技術的に与えられる。小文字のp_a・p_b・r・wは本来未知数であるが、このうちp_aを単位価格とし、さらにrとwとのいずれかを先決させれば、方程式は解ける。以上のモデルで見られる第一の特色は需給関係の代りに技術関係が価格決定の基礎になっていることであり、第二の特色は賃金と利潤とが互に一方が高まれば他方が低まるという相反関係で考えられていることである。なお以上の形式化についてはP. Sraffa: *Production of Commodities by Means of Commodities*, 1960 参照。

三 生産と生活とのつながり

以上は主としてマールシャル『原理』の第五編を中心に価格論の課題をさぐったのであるが、ここで第六編の分配論に考察を進めなければならない。前に述べた通り、マールシャルの生産費通減・逓増はむしろ労働生産性の変化を中心とするものであつて、賃金率や利潤率は一定と考えられていた。もちろんそれら所得の変化によつても生産費は変化するものであり、経済発展にともなうそれらの傾向を尋ねることが、問題となるわけであつて、『原理』第六編の「国民所得の分配」とくにその第十二章

の「経済進歩の影響」はこれに答えるものであるといつてよい。マーシャルがそこで経済進歩というのは、生産の上昇と生活の向上とが互に因となり果となつて進むことを指し、そういうことを基礎にして分配論全体の視点も定められているし、「正常価格」に含まれている所得項目の変化も考えられているといつてよい。

『原理』第六編の理解のために、まず古典派のいわゆる「賃金鉄則」の説をマーシャルが批判していることに注意したい。⁽¹⁾マーシャルによれば、賃金が最低生存費に固定化されることを強く主張したのはフランスのフィジオクラットであつて、イギリスではスミスもマルサスもリカードも必ずしもこの説を固持したわけではなく、ただししばしばそう解釈される不注意な説明を行なつたという。ドイツの多くの社会主義者たちは、これを「賃金鉄則」と名づけ、資本主義体制のもとではこれが作用し続けると信じ、リカードの権威を借りてその説を守ろうとした。しかし、いづれにせよ、マーシャルはこの説に反対し「高い賃金はこれを受ける者の能率のみならずなおその子孫の能率をも高める結果がある」とし、さらに「このことを研究し始めたのは、漸くわれわれの一代前

であつた」といって、その先覚者としてウォーカーその他アメリカの経済学者をあげている。⁽²⁾いま引用した句では能率という言葉が用いられているが、マーシャルはまた好んで生活とか「生活程度」とかいう言葉を用い、その意味を生産活動の源泉と解した。⁽³⁾そうして生活程度が進めば生産活動が進み、生産活動が進めば生活程度が進むというふうに、互に因となり果となるものと考えた。

したがってそれは最低生存費という場合の生存とは考え方が違ふ。言葉としては生活も時に生存を意味するが、マーシャルは両者を区別しようとするのである。マーシャルによれば、単に欲望の上から必要とか快適とかを考へる見方と、活動の上から能率の増進を考へる見方とが区別され、賃金問題はむしろ生産活動の上から考へねばならぬとして、そこに分配と生産とのつながりを認めようとするのである。

こうしてマーシャルは賃金上昇は生活程度の上昇であり、それはやがて生産活動の上昇につながると考へたのであるが、しかし現実の動きがそのまま労働に有利になつていないと見たのではない。彼は別の箇所、「人を現在のありのままに又今日までありしままに見れば、西洋

諸国においては能率ある労働の収める収入はその全幅の精力を維持しこれを活動に投ぜしむる失費を償うに要する最低額以上にあまり出ていないことは依然として真である⁽⁴⁾」といっている。つまり、マーシャルは賃金上昇が生産活動の増進につながることを認めながら、それが過去および現在において十分実現していたというのではなく、むしろ将来のために必要だというのである。もしくは、マーシャルは賃金上昇を経済発展の必要条件と認めながら、多分にそれを道義的意味で主張するのである。後にケインジアンでは有効需要の促進ということが考えられたが、マーシャルではこの考え方は熟さず、むしろこの辺の解明はヒューマンスティックの調子が高い。第六編の冒頭では「本編の基調は、自由の人間は機械や馬や奴隷と同一原理によって作業につかえられているものではないという事実にある⁽⁵⁾」といい、また「高給労働は一般に能率的であるという事実は、われわれの如何なる事実よりも人類未来の希望に満ちている事実である⁽⁶⁾」ともいう。これはそもそも『原理』第一編の開題に経済学は「人間の研究」であり、「福祉の物質的要件の獲得・使用に関する研究」であるといっているマーシャル経済

学全体の基調であるといふべきかも知れない。前に述べた通り、イギリス古典派の「賃金鉄則的」な考え方がいづれかといえば生産第一主義の立場に立ち、生産上昇のために生活を犠牲にしてもやむを得ないと考えるのに対し、マーシャルは生活の向上に意義を認め、ややヒューマンスティックにそれを強調したのである。もちろん、マーシャルにおいても前述のように生活の向上は生産活動の増進と結びつくという主張も含まれ、単に道徳的意味で生活の向上を唱えるわけではなく、したがって問題はもう少し込み入っているのであるが、生産そのもののために生活の向上が必要だとする理由についてなお多くの点が論じ残されていたことは否めない。

いづれにせよ、第六編におけるこの賃金論によってマーシャルの「正常価格」は分配論的に裏付けされることになる。すなわち、「正常価格」は生産費に他ならないが、生産費の変化は一方では労働生産性の変化という観点から第五編の収穫法則として展開され、他方賃金や利潤の変化という観点から第六編の分配論として展開されるのである。収穫法則は経済発展にともない産業別に増もしくは減減を現わすことによって相対価格の変化と

いう問題につながるのであるが、分配は産業を通じて一般に生産活動を促進する賃金の高さの決定として考察される。両者はいずれも「正常価格」としての生産費に關しての問題であり、これによって価格論と分配論とが密接に關係づけられるとともに、生産と分配とも深くつながることになる。

ここでのマーシャルの考え方は今日慣用の言葉でいうと巨視的・動態的なものである。価格論といつてもここでは需要供給論を離れ、労働生産性の變化を産業別に類型化することによって巨視的・動態的に価格構造論を展開したものといえるし、分配論も古典派の最低生存費説の批判から出發して全体としての賃金水準をとりあげるかぎり、やはり巨視的・動態的なのである。このような視点についてマーシャル自身はつきり意識していたわけではないし、その説明の仕方とも曖昧な点を含んでいるのであるが、彼の狙いは案外今日いう巨視的・動態的な視点に立っていたと私は解するのである。⁽⁷⁾

マーシャルの分配論についてこれ以上深く立入る余裕はない。マーシャルには国民所得の概念が論ぜられ、しかもいわゆる「純生産」という生産面と「国民分配分」

という分配面とが明確に区別されたことを忘れてはならない。⁽⁸⁾（ただし国民所得の支出面の規定はケインズを待たねばならなかった。）またマーシャルにはいわゆる限界生産力説が含まれていたことも注意しなければならないが、たとえば労働の限界生産力を論じた箇所には、「一労働者の収入はその作業の純生産物（限界労働者の生産力）に等しくなる傾向があるとの説はそれ自体何らの実質的意味を有せぬ」⁽⁹⁾といひ、別の箇所で「労働の限界生産力は労働の需要価格を支配するが、他面賃金は能率ある労働の養成費と密接な關係がある」⁽¹⁰⁾ともいひ、限界生産力説に批判的であることがうかがえる。マーシャルが、そこであげている羊飼の数字例で明らかのように、賃金の高さは予め与えられていて、限界生産力がその賃金に等しくなれば、それ以上に雇用が行なわれないというのがここでの説明であるが、然るかぎり賃金そのものの決定は限界生産力と關係なく、この点マーシャルの批判は正しい。ただここでもマーシャルは生産費説的に生活程度の上昇から賃金の動態論を説くことに徹底せず、むしろ需要供給説的立場から需要としての限界生産力を持ち出したのである。また資本と労働との關係についても、時には静

態的に代用原理が強調され、しかも全体としてはむしろ動態的に「余剰の増大とその分配」⁽¹⁾というようなことが目指されていて、その間の関連がはっきりしないままに終っているのである。これらについてなお多く吟味すべき論点を残しているが、他日を期したい。

- (1) Marshall: *Principles*, pp. 505—8 (VI, i, 2). 大塚訳
第四分冊一九二五—二六。
- (2) Marshall: *Principles*, p. 510 (VI, i, 2). 大塚訳、第
四分冊二六—二七。引用は抄録。
- (3) Marshall: *Principles*, p. 504 (VI, i, 1). 大塚訳 p.
689 (VI, xiii, 1). 大塚訳「第四分冊一〇—一三、二四—二七、二八—
三〇、三二—三三、三六—三七、三八—三九、四〇—四一、四二—
四三、四四—四五、四六—四七、四八—四九、五〇—五一、五二—
五三、五四—五五、五六—五七、五八—五九、六〇—六一、六二—
六三、六四—六五、六六—六七、六八—六九、七〇—七一、七二—
七三、七四—七五、七六—七七、七八—七九、八〇—八一、八二—
八三、八四—八五、八六—八七、八八—八九、九〇—九一、九二—
九三、九四—九五、九六—九七、九八—九九、一〇〇—一〇一、一〇二—
一〇三、一〇四—一〇五、一〇六—一〇七、一〇八—一〇九、一〇一〇—一〇一
一、一〇一二—一〇一三、一〇一四—一〇一五、一〇一六—一〇一七、一〇一八—
一〇一九、一〇二〇—一〇二一、一〇二二—一〇二三、一〇二四—一〇二五、
一〇二六—一〇二七、一〇二八—一〇二九、一〇三〇—一〇三一、一〇三二—
一〇三三、一〇三四—一〇三五、一〇三六—一〇三七、一〇三八—一〇三九、
一〇四〇—一〇四一、一〇四二—一〇四三、一〇四四—一〇四五、一〇四六—
一〇四七、一〇四八—一〇四九、一〇五〇—一〇五一、一〇五二—一〇五三、
一〇五四—一〇五五、一〇五六—一〇五七、一〇五八—一〇五九、一〇六〇—
一〇六一、一〇六二—一〇六三、一〇六四—一〇六五、一〇六六—一〇六七、
一〇六八—一〇六九、一〇七〇—一〇七一、一〇七二—一〇七三、一〇七四—
一〇七五、一〇七六—一〇七七、一〇七八—一〇七九、一〇八〇—一〇八一、
一〇八二—一〇八三、一〇八四—一〇八五、一〇八六—一〇八七、一〇八八—
一〇八九、一〇九〇—一〇九一、一〇九二—一〇九三、一〇九四—一〇九五、
一〇九六—一〇九七、一〇九八—一〇九九、一一〇〇—一一〇一、一一〇二—
一一〇三、一一〇四—一一〇五、一一〇六—一一〇七、一一〇八—一一〇九、
一一一〇—一一一一、一一一二—一一一三、一一一四—一一一五、一一一六—
一一一七、一一一八—一一一九、一一二〇—一一二一、一一二二—一一二三、
一一二四—一一二五、一一二六—一一二七、一一二八—一一二九、一一三〇—
一一三一、一一三二—一一三三、一一三四—一一三五、一一三六—一一三
七、一一三八—一一三九、一一四〇—一一四一、一一四二—一一四三、一
一四四—一一四五、一一四六—一一四七、一一四八—一一四九、一一五〇—
一一五一、一一五二—一一五三、一一五四—一一五五、一一五六—一一
五七、一一五八—一一五九、一一六〇—一一六一、一一六二—一一六三、
一一六四—一一六五、一一六六—一一六七、一一六八—一一六九、一
一七〇—一一七一、一一七二—一一七三、一一七四—一一七五、一一七
六—一一七七、一一七八—一一七九、一一八〇—一一八一、一一八二—
一一八三、一一八四—一一八五、一一八六—一一八七、一一八八—一
一八九、一一九〇—一一九一、一一九二—一一九三、一一九四—一一
九五、一一九六—一一九七、一一九八—一一九九、一二〇〇—一二〇
一、一二〇二—一二〇三、一二〇四—一二〇五、一二〇六—一二〇七、一
二〇八—一二〇九、一二一〇—一二一一、一二一二—一二一三、一二一四—
一二一五、一二一六—一二一七、一二一八—一二一九、一二二〇—一二
二一、一二二二—一二二三、一二二四—一二二五、一二二六—一二二七、
一二二八—一二二九、一二三〇—一二三一、一二三二—一二三三、一二
三四—一二三五、一二三六—一二三七、一二三八—一二三九、一二四〇—
一二四一、一二四二—一二四三、一二四四—一二四五、一二四六—一
二四七、一二四八—一二四九、一二五〇—一二五一、一二五二—一二
五三、一二五四—一二五五、一二五六—一二五七、一二五八—一二五
九、一二六〇—一二六一、一二六二—一二六三、一二六四—一二六五、
一二六六—一二六七、一二六八—一二六九、一二七〇—一二七一、一
二七二—一二七三、一二七四—一二七五、一二七六—一二七七、一二
七八—一二七九、一二八〇—一二八一、一二八二—一二八三、一二八
四—一二八五、一二八六—一二八七、一二八八—一二八九、一二九〇—
一二九一、一二九二—一二九三、一二九四—一二九五、一二九六—一
二九七、一二九八—一二九九、一三〇〇—一三〇一、一三〇二—一三〇
三、一三〇四—一三〇五、一三〇六—一三〇七、一三〇八—一三〇九、一
三一〇—一三一〇、一三一二—一三一三、一三一四—一三一五、一三一
六—一三一七、一三一八—一三一九、一三二〇—一三二一、一三二二—
一三二三、一三二四—一三二五、一三二六—一三二七、一三二八—一
三二九、一三三〇—一三三一、一三三二—一三三三、一三三四—一三
三五、一三三六—一三三七、一三三八—一三三九、一三四〇—一三四
一、一三四二—一三四三、一三四四—一三四五、一三四六—一三四七、
一三四八—一三四九、一三五一—一三五二、一三五三—一三五四、一
三五五—一三五六、一三五七—一三五八、一三五九—一三六〇、一三
六一—一三六二、一三六三—一三六四、一三六五—一三六六、一三六
七—一三六八、一三六九—一三七〇、一三七一—一三七二、一三七三—
一三七四、一三七五—一三七六、一三七七—一三七八、一三七九—一
三八〇、一三八一—一三八二、一三八三—一三八四、一三八五—一三八
六、一三八七—一三八八、一三八九—一三八〇、一三九一—一三九二、
一三九三—一三九四、一三九五—一三九六、一三九七—一三九八、一
三九九—一四〇〇、一四〇一—一四〇二、一四〇三—一四〇四、一四〇
五—一四〇六、一四〇七—一四〇八、一四〇九—一四一〇、一四一一—
一四一二、一四一三—一四一四、一四一五—一四一六、一四一七—一四
一八、一四一九—一四二〇、一四二一—一四二二、一四二三—一四二四、
一四二五—一四二六、一四二七—一四二八、一四二九—一四三〇、一四
三一—一四三二、一四三三—一四三四、一四三五—一四三六、一四三
七—一四三八、一四三九—一四四〇、一四四一—一四四二、一四四三—
一四四四、一四四五—一四四六、一四四七—一四四八、一四四九—
一四五〇、一四五二—一四五三、一四五五—一四五六、一四五七—一
四五八、一五五九—一五六〇、一五六二—一五六三、一五六五—一五六
六、一五六八—一五六九、一五七〇—一五七一、一五七三—一五七四、
一五七六—一五七七、一五七九—一五八〇、一五八二—一五八三、一
五八五—一五八六、一五八八—一五八九、一五九〇—一五九一、一五
九三—一五九四、一五九六—一五九七、一五九九—一六〇〇、一六〇
二—一六〇三、一六〇五—一六〇六、一六〇八—一六〇九、一六一〇—
一六一一、一六一三—一六一四、一六一六—一六一七、一六一九—一
六二〇、一六二二—一六二三、一六二五—一六二六、一六二八—一六
二九、一六三一—一六三二、一六三四—一六三五、一六三七—一六三
八、一六四〇—一六四一、一六四三—一六四四、一六四六—一六四七、
一六四九—一六五〇、一六五二—一六五三、一六五五—一六五六、一
六五八—一六五九、一六六一—一六六二、一六六四—一六六五、一
六六七—一六六八、一六七〇—一六七一、一六七三—一六七四、一
六七六—一六七七、一六七九—一七八〇、一七八二—一七八三、一七
八五—一七八六、一七八八—一七八九、一七九〇—一七九一、一七九
三—一七九四、一七九六—一七九七、一七九九—一八〇〇、一八〇二—
一八〇三、一八〇五—一八〇六、一八〇八—一八〇九、一八一〇—一
八一〇、一八一二—一八一三、一八一五—一八一六、一八一八—一
八一九、一八二〇—一八二一、一八二二—一八二三、一八二五—一八
二六、一八二八—一八二九、一八三〇—一八三一、一八三二—一八三
三、一八三五—一八三六、一八三八—一八三九、一八四〇—一八四
一、一八四三—一八四四、一八四六—一八四七、一八四九—一八五〇、
一八五二—一八五三、一八五五—一八五六、一八五八—一八五九、
一八六〇—一八六一、一八六二—一八六三、一八六五—一八六六、一
八六八—一八六九、一八七〇—一八七一、一八七三—一八七四、一
八七六—一八七七、一八七九—一八八〇、一八八二—一八八三、一
八八五—一八八六、一八八八—一八八九、一八九〇—一八九一、一
八九三—一八九四、一八九六—一八九七、一八九九—一九〇〇、一九
〇二—一九〇三、一九〇五—一九〇六、一九〇八—一九〇九、一九一〇—
一九一〇、一九一二—一九一三、一九一五—一九一六、一九一八—一
九一九、一九二〇—一九二一、一九二二—一九二三、一九二五—一九
二六、一九二八—一九二九、一九三〇—一九三一、一九三二—一九
三三、一九三五—一九三六、一九三八—一九三九、一九四〇—一九
四一、一九四三—一九四四、一九四六—一九四七、一九四九—一九
五〇、一九五二—一九五三、一九五五—一九五六、一九五八—一九
五九、一九六〇—一九六一、一九六二—一九六三、一九六五—一九
六六、一九六八—一九六九、一九七〇—一九七一、一九七三—一九
七四、一九七六—一九七七、一九七九—一九八〇、一九八二—一九
八三、一九八五—一九八六、一九八八—一九八九、一九九〇—一九
九一、一九九三—一九九四、一九九六—一九九七、一九九九—二〇
〇〇、二〇〇二—二〇〇三、二〇〇五—二〇〇六、二〇〇八—二〇〇九、
二〇一〇—二〇一〇、二〇一二—二〇一三、二〇一五—二〇一六、二〇一
八—二〇一九、二〇二〇—二〇二一、二〇二二—二〇二三、二〇二五—
二〇二六、二〇二八—二〇二九、二〇三〇—二〇三一、二〇三二—二
〇三三、

分冊二七ページ。

- (7) マシアルに「集合的」「巨視的」な見方が含まれて
いることはシュムペーター（中山・東畑監訳『十大経済学
者』中の山田雄三訳「マシアル」）が指摘している。と
くに分配論の巨視的な見方についてはハチスン（前掲書）
が指摘している。
- (8) Marshall: *Principles*, p. 523 (VI, i, 10). 大塚訳第
四分冊四七—八ページ。
- (9) Marshall: *Principles*, p. 518 (VI, i, 8). 同47 p.
517 の羊飼の数字例。大塚訳第四分冊三七—四一ページ。
- (10) Marshall: *Principles*, p. 532 (VI, ii, 3). 大塚訳第四
分冊六一ページ。
- (11) 第六編の冒頭にこの言葉が出てくる。

四 マーシャルの組織論的思考

以上私はもっぱらマーシャル『原理』の価格論および分配論についてそこに労働生産性および賃金の変化を中心とする動態的な問題が展開されていることを指摘したのであるが、ここで最後にその方法なり考え方なりが、むしろマーシャル経済学の基本をなすものである点をとくに考えてみたいのである。

マーシャルは『原理』第五編の需要供給論の冒頭に、

分析方法に関連して「力学的均衡」と「生物学的均衡」とを分け、次のごとくいつている。

「青年は盛んに成長して壮年に達し、これを過ぎれば漸次心身固まって気力衰え、遂に退いて後進気鋭の生に路を譲る。経済諸力はかくのごとき力に似ているものと考えられる。これをかく考えることは本書の研究を進めるに従って愈々必要となるであろう。しかしかかる深い研究に進む準備として、まず最初は一層単純な力の平衡を究めたいと思う。すなわち弾力性ある一本の糸に懸かる石、又は鉢の中に相寄って静止せる数個の球の力学的均衡に該当する単純な場合これである⁽¹⁾。」

この句のなかには「生物学的均衡」という語は直接出てこないけれど、この箇所の欄外にはつきり「生物学的均衡」という語が用いられている⁽²⁾。これに対し、もっと単純な力のバランスを考えるのをマーシャルは「力学的均衡」と呼んでおり、それはこの句の終りに明らかに出てくる。ところでマーシャルは、経済学研究の最初の準備段階では「力学的均衡」を考えてもよいが、研究の進むにつれてむしろ「生物学的均衡」に似たものを考えな

ければならぬ、というのである。

しかしここでマーシャルが「力学的」と「生物学的」とを区別する点についてはこれだけでは必ずしも十分に理解できない。「力学的均衡」としてあげている例は、「弾力性ある糸につるした石」とか、「鉢のなかで寄り集まって止まってしまふ数個の球」とかいったことで、要するに力の均合いの結果運動が止まってしまふ場合が考えられているようだが、実際にはもう少し別の意味で「力学的均衡」が語られたように思われる。また、「生物学的均衡」の例も、この箇所の説明だけ読むと、生物が生れて年老いて死んでいくという過程が思い出され、この場合にもそれをなぜ均衡というのかは納得し難い。それには『原理』の他の箇所も参照する必要があるし、さらにマーシャルには一八九八年に『エコノミック・ジャーナル』誌上に発表した「力学的と生物学的アナロジー⁽³⁾」なる論文があり、これも表題から見てわかるように、この際は非とも参照しなければならない文献である。

さてマーシャルのいう「力学的均衡」というのが、経済学の上では、需要供給の関係によって価格が決定され

するという考え方を指していたことはだいたい認めてよい。しかし彼が「力学的」とか「静態的」とかいう方法でつかもうとしたのは単に需要と供給との二つの力の均り合いだけではなく、いわゆる「正常状態」もしくは「正常均衡」と呼ばれるものも含まれている。マーシャルの説明によると、「正常状態」とは前の例のように単に運動の休止を考えるのではなく、外部からの攪乱がなければ同じ状態を持続する内面的な諸力を問題にしており、したがって時間的な持続を許す状態なのである。そうしてマーシャルは、攪乱的要素を暫く度外視することを「静態的」(ステティック)又は「静止的」(ステーションナリー)と呼んでおり、その場合には運動が全然休止してしまうことではないと断っている。⁽⁴⁾論文「力学的と生物学的アナロジー」のなかに出てくる例でいえば、ここで静態的というのは流動力学での恒常運動とか、固体では独楽とか自転車とかの運動を考えればよい、と説明されている。⁽⁵⁾経済学の上では今日いわれている「恒常成長」とか「バランスド・グロース」とかいうのがこの考え方に近い、それは普通には動態的と見られているが、マーシャルでは静態的とか単純な力の関係とか考えられ

ていたのである。

これに対し、マーシャルの「生物学的均衡」という概念も補説を要する。前に引用した『原理』第五編の句によると、生物が生まれ年老いて死んでいくという過程が考えられているようであるが、マーシャルの真意は個体なり種属なりの新陳代謝を考えて、これを「生の力と衰の力とのバランス」といったようである。この点については、第五編よりも前に第四編第八章にやや詳しい説明があつて、そこでは一般に有機体というものが「分化」(ディファレンシェーション)と「集化」(インテグレーション)との交互作用によって進化していくことが説かれている。⁽⁶⁾さらに論文「力学的と生物学的アナロジー」のなかでは次のごとくいう。

「力学における破壊は作用せる力の量における変化によつて惹き起こされ、その性格における変化によるのではない。しかし生命の事実にあつては力の性格もまた変化するのである。産業的ならびに社会的の「進歩」または「進化」は単なる増減ではない。それは有機的成長であり、相互に影響し合う数え切れぬ要素の衰微によつて精練され、制限され、また時には修正さ

れるものである。そうしてかかる相互影響は各要素がすでに達したその成長の段階に応じて異なるものである。⁽⁷⁾

ここで「相互影響」という言葉が大切である。この句の前後の説明を読むと、Aの変化がBに作用し、これによるBの変化が再びAに作用してAの別の変化をもたらすというような過程が考えられていたようであり、マーシャルの言葉では「一の力が作用して事物を動かす時、それによってその事物がやがて作用するところの力を変化させる⁽⁸⁾」というのである。それはいわゆる「循環的因果関係」とか「累積過程」とかいう考え方に近いものであり、そういう意味で単に力と力とのバランスを考える静態的な見方とは異って、むしろ変化の過程に力点をおく動態的な見方が考えられているといえるのである。しかも前の引用句で明らかにのように、マーシャルでは「進歩」とか「進化」とかいう質的变化が問題であり、均衡が成立したり持続したりするというよりは、相互に累積的な作用・反作用によって組織が改善されていく過程が問題なのである。マーシャルは「生物学的均衡」という語を用いるけれど、実は均衡という語は適わしくなく、

ここでは経済組織の進化を考えようとしているというべく、むしろ「組織論的」思考と名づけた方が、よいように私には思われる。マーシャルは「経済学のメッカ」をそういう経済組織論にあると考えたのである。

ところで、マーシャルはこの組織論的思考の形式化をあまり進めようとしなかった。しばしばいわれているように、マーシャルは経済学における数学の適用について極めて控え目であった。経済学における最初の力学的段階にあっては数学の適用を可能と考えたが、次第に進んで生物学的段階になるとそれを断念したようである。論文「力学的と生物学的アナロジー」のなかでも、「経済学への数学の最も有用に適用されるのは短くて単純なものであり、それは僅かな記号を使うに過ぎない。そうしてその目的は大きな経済運動の無限に複雑な関係を示そうというよりは、むしろそのある小部分に対して明かるい光を投げようとするにある⁽⁹⁾」と述べている。たしかにシュムペーターのいうごとく、マーシャルが数学の適用を控え目に考え過ぎたのはむしろその欠点というべきかも知れない。⁽¹⁰⁾ 組織論における循環的因果関係も最近の「フィード・バック」のような構想を借りてもっと形式

化することができようし、無限に複雑な関係といつても集合的・巨視的な見方によって多少とも接近することができよう。しかしマーシャルはそういう形式化をあまりやろうとしなかった。

ここで私がとくに読者の注意を促したいのは、形式化よりも問題自体である。分化が進めば集化が進み、集化が進めば分化が進むという組織の進化という問題はたしかにわれわれの取り組まねばならぬ問題なのである。マーシャルはこれを内部経済と外部経済との関係、個人の自由と共同要素との関係というような内容で展開しようとしたし、また生産が進めば生活が進み、生活が進めば生産が進むという経済進歩の問題としてつかもうとした。一般に、分析を精緻にし実証を詳細にするのはもとより大切だが、われわれの取り組まねばならぬ基本問題を見失ってはならない。たしかにマーシャル以後の近代理論はむしろ静態中心に花々しい展開が見られ、したがってマーシャル経済学の本来の特色ある部分は軽視されていったように私には思われる。この論文で指摘したような、生産性の変化による価格構造とか、生産と生活との相互影響を考える分配論とかは、もう一度今日の立場

から考え直してよいのではないだろうか。さらにマーシャルについては、第三編の消費理論や第四編の生産理論がおよそ今日の静態分析とは別な展開を目指していることを私は指摘したいのであるが、その考察は別の機会に譲らなければならない。

- (1) Marshall: *Principles*, p. 323 (V, 1, 1.) 大塚訳第三分冊一三ページ。
- (2) 前掲箇所の欄外の見出しは「反対力平衡の生物学的・力学的観念」となっている。
- (3) Marshall: *Mechanical and Biological Analogies in Economics* は『*Economic Journal*, March 1898 に発表の論文 "Distribution and Exchange" より抄録したもので、後に *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A. C. Pigou, London, 1925 に再録する。邦訳は、杉本栄一編『マーシャル経済学選集』のうちに山田雄三訳「経済学における力学的類同と生物学的類同」。
- (4) Marshall: *Principles*, p. 366 (V, v, 2.) 大塚訳、第三分冊七八ページに、「著者の考では正常価値の問題は経済動態学に属する。何となれば一には静態学は実は動態学の一分枝に過ぎないからである。又一には経済的休止についての暗示は総て暫定的に過ぎぬからである。」
- (5) 『マーシャル経済学選集』二五五ページ参照。
- (6) Marshall: *Principles*, p. 241 (IV, vii, 1.) 大塚訳、

第二分冊一七〇ページに、「有機体——社会的有機体たると自然的有機体たるを問わぬ——の発達は、一面においてその各部分間の機能細分を増加せしめ、他面においてその各部分間の密接な関係を増加せしめる。」この句のあとで、分化・集化という語が出てくる。

(7) 『マーシャル経済学選集』二五八ページ。

(8) 前掲書、二五一ページ。

(9) 前掲書、同所。

(10) 中山・東畑監修訳『シュムペーター十大経済学者』中、

山田雄三訳「マーシャル」参照。とくに訳書一四一ページに、「数学的な訓練のある人々をして数学は経済学者の必要とするすべてであると思わしめるような範例を示すことを彼は恐れていたのであり、またそれは正しかったのである。けれども彼の仕事によって幾分でも刺戟を受け、これによって精密経済学の本領を弁護し始めていた人々に対しては、彼はもっと鼓舞を与えればよかったであろうと思われる。」

(一橋大学教授)